

歴史サークル 10月の活動

2018年10月19日(金)

「大宇陀松山の街並み・松山城跡・万葉の阿騎野をめぐる」

宇陀松山城は、南北朝以来 宇陀郡の有力国人秋山氏の本城として築かれた。

天正13年(1585)豊臣秀長の大和郡山入部に伴う秋山氏の退去後は、豊臣家配下の大名の居城として改修・整備が行われ、大和郡山城・高取城と並ぶ大和国支配の拠点となりました。

しかし、関ヶ原合戦の後入封した福島高晴が、元和元年(1615)「大坂の陣」直後に改易(領地・家屋敷を没収されること。)されたことにより城は取り壊されました。この城割役を担ったのが小堀遠江守正一(遠州)と中坊左近秀政です。

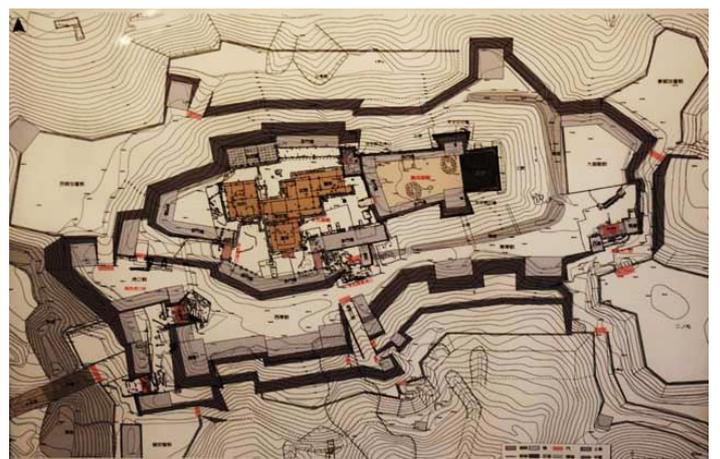
福島高晴改易後は、織田信雄(信長次男)・高長・長瀬・信武の4代が80年にわたり、織田宇陀松山藩として栄えました。

その後、織田家が元禄8年(1695)に丹波柏原に移封され後は、幕府領となった。

信武の子、信休は、丹波柏原藩二万石に転封され、藩は、明治維新まで続く。



天守郭にて





宇陀松山城



森野家の祖先は、吉野南朝に仕えたと伝えられ、大和国吉野郡下市に住居していました。初代兵部為定（元禄11年（1568）9月3日没）は農業の傍ら葛粉の製造を始め、「吉野葛」の名称が生まれ、世に知られるようになったのが森野吉野葛本舗の始まりです。およそ450年前のことです。その後、数代を経て元和2年（1616）、葛晒しに欠かすことができないよりよい良質の水、寒冷な気候を求めて現在の地「大宇陀」に移住しました。





かぎろひの宇陀

阿騎野の空が「かぎろひ」で茜色に染まる冬の朝、この歌が生まれました。
 軽皇子(文武天皇)の狩猟のお供をしたのが、柿本人麻呂です。

ひむがし
 東の

かぎろひ
 野に 炎の

立つ見えて
 かへり見すれば

かたぶ
 月 傾きぬ